

東北地方における民有林経営の現状と課題

奥田裕規 (森林総研)

要旨: 近年の林業不振のなかで、間伐等適正な森林管理が行われないという状況を踏まえ、「森林の手入れ(森林整備)に関するアンケート調査」を、青森県三八地方、岩手県久慈、宮城県栗駒高原、秋田県仙北東、仙北西、の5森林組合の組合員に対して行った。このアンケート結果によれば、組合員の多くは、将来とも森林を所有し続け、木材の販売を目指した林業経営を行いたいと考えている。しかし、多くの組合員が森林管理にかかる費用を負担に感じ、その軽減措置を求める一方、手入れの相談窓口の充実を求める声も多かった。森林管理の主体は、基本的には森林組合中心ではあるが、久慈、仙北西、栗駒高原では「自力で」という組合員も比較的多かった。
キーワード: 東北地方、民有林、林業経営、森林組合、森林管理

I はじめに

安い外材輸入の増加等により1960年に86.7%あった国産材自給率は、1969年には50%を切り、2000年には18.2%まで減少した。一方で、国産材供給力の増大を目指して、伐採跡地や荒廃林野の復旧造林に努めた結果、日本の人工林面積は1,000万haに達したが、9歳級以下の保育・間伐期にある人工林が全体の8割を超えといった、歪な年齢構成になっており、このことが、近年の林業不振と相まって、間伐等適正な森林管理が行われないという問題を惹起させている。特に、東北地方の林業経営は、主な植栽木はスギであり、林木の生長が遅く、保育の期間が長いという特徴をもっている。このような東北地方の林業経営の現状を把握するため、「森林の手入れ(森林整備)に関するアンケート調査」を、2006年3月、在村・不在村同数の調査が可能な、青森、岩手、宮城、秋田の東北4県に所在する三八地方(青森)、久慈(岩手)、仙北東・仙北西(秋田)、栗駒高原(宮城)の5森林組合の所属組合員に対して行ったので、その結果を報告する。送付先は、各組合が選定、久慈200人、栗駒高原130人、三八地方、仙北西及び仙北東各100人に発送し、回収率が最も高かったのが栗駒高原の62.3%、仙北東60.0%、仙北西46.0%、三八地方41.0%、

久慈35.0%と続き、不在村より在村の方が回収率は高かった(表-1)。

II アンケート結果

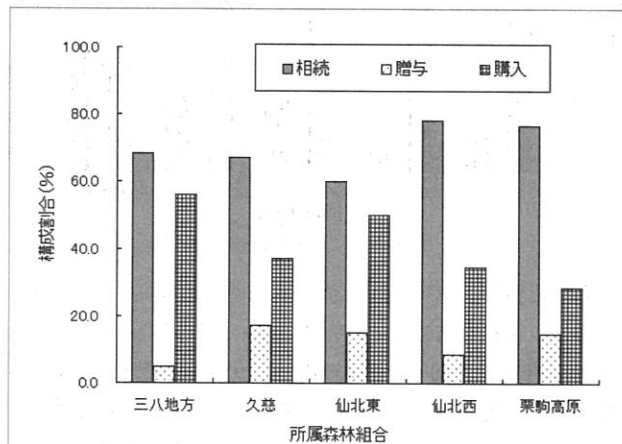


図-1. 森林の取得方法(在村・不在村合計)

森林の取得方法について、アンケート回答者全体の70.1%、全ての組合の60%以上の組合員が相続により森林を取得していた。また、購入により森林を取得した組合員が、最も多いのが三八地方で56.1%、次いで仙北東の50.0%、久慈の37.1%、仙北西の34.8%と続き、栗

表-1. アンケート表発送・回収数

	全体			発送数			回収数				回収率 合計
	合計	在村	不在村	合計	在村	不在村	合計	在村	不在村	不明	
三八地方	6071	5752	319	100	50	50	41	30	8	3	41.00
久慈	2918	2777	141	200	100	100	70	53	16	1	35.00
栗駒高原	1756	1675	81	130	65	65	81	58	22	1	62.31
仙北東	2725	2564	161	100	50	50	60	39	20	1	60.00
仙北西	1568	1488	80	100	50	50	46	33	11	2	46.00

仙北西の在村には管外ではあるが大仙市内の旧中仙町、太田町在住の組合員を含む

Okuda HIRONORI (Forestry and Forest Products Research Institute, Ibaraki 305-8687)

The situation and the subject of private forest management in Tohoku district

駒が最も低く、28.4%であった(図-1)。在村・不在村別には、相続は在村77.5%、不在村53.2%、一方、購入は在村37.6%、不在村45.5%と不在村の森林購入活動が活発である。

所有森林に通う頻度について、しばしば訪れるが在村62.4%、不在村27.3%と在村が圧倒的に多い。在村のみについて森林組合別にみると、「しばしば訪れる」の割合が最も多いのが三八地方の86.7%、次いで久慈の79.2%、仙北西の66.7%、仙北東の59.0%と続き、最も少ないのが栗駒高原の48.3%であった(図-2)。

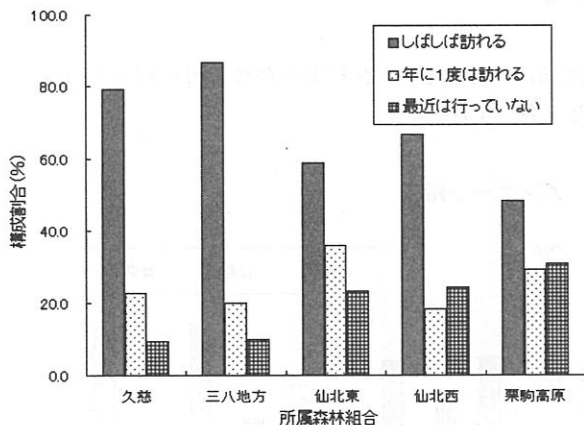


図-2. 所有森林に通う頻度(在村のみ)

境界を認知している組合員の割合についても、在村88.3%、不在村63.6%と在村が多い。在村のみについて森林組合別にみると、栗駒高原が79.3%と若干少なかったが、その他の組合では、仙北西84.8%、仙北東92.3%、久慈92.5%、三八地方96.7%とほぼ8割以上の組合員が境界を認知していた(図-3)。

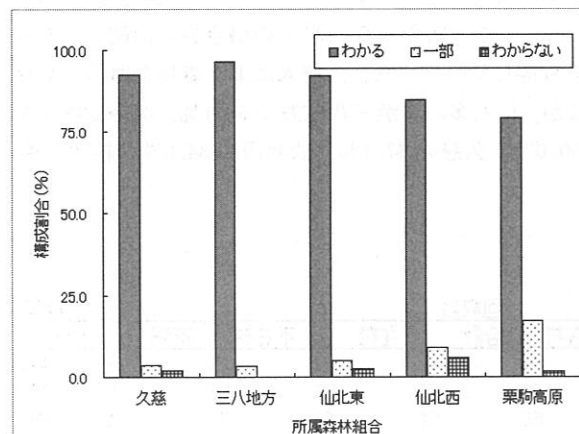


図-3. 境界が分かるか(在村のみ)

森林の管理状況については、在村59.6%、不在村46.8%と、在村の方が、「管理状況が良い」と答えた組合員が多かった。そして、在村のみについて森林組合別にみると、「所有森林が良好に管理されている」と考える組合

員の割合は、三八地方が70.0%と最も多く、仙北東の69.2%、仙北西57.6%、久慈の54.7%と続き、そして、栗駒高原の53.4%が最も少なかった。このように、半数以上の在村組合員が、自らの所有する森林は「良好に管理されている」と考えており、特に三八地方、仙北東でその割合が高かった(図-4)。

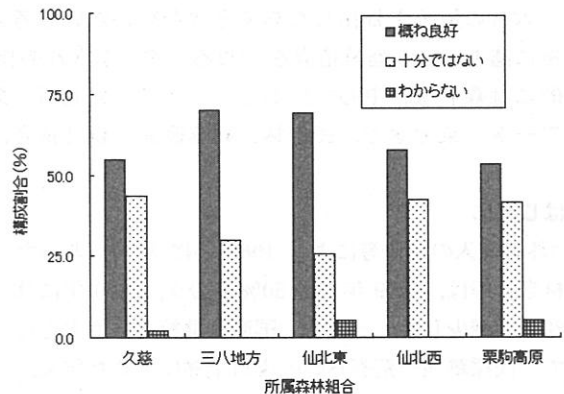


図-4. 十分な手入れがなされているか(在村のみ)

また、森林整備の実施主体については、在村は、森林組合に委託69.0%、自力で実施56.0%と自力が若干少ない程度であったが、不在村は、森林組合は62.2%と高かったが、自力は24.4%に過ぎなかった。在村のみについて森林組合別にみると、自力で森林整備を行った組合員の割合は、仙北東が最も多く64.9%、栗駒高原55.9%、三八地方55.6%、久慈54.5%と続き、仙北西が46.2%と最も少なかった。そして、森林組合に委託した組合員の割合が最も多かったのは仙北東の75.7%、三八地方74.1%、栗駒高原70.6%、久慈63.6%と続き、最も少なかったのが仙北西61.5%であった(図-5)。

森林整備をこの5年間実施していない組合員は、在村18.8%、不在村36.4%と不在村が圧倒的に多い。そして、

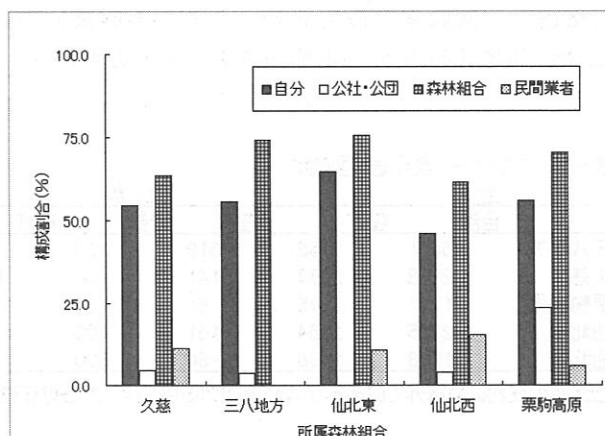


図-5. 森林整備の実施主体(在村のみ)

その理由として、在村・不在村を問わず、多くの人が「資金面での問題」と「自分が手入れをしたいがその技術と時間的余裕がないこと」をあげているが、不在村の特徴として57.1%の人が「居住地から遠いこと」をあげている。以上のことから、金をかけたくないから森林組合に頼まない。そして、自力で手入れをしたいが高齢でできないか、外に働きに出ているため時間的な余裕がないため手入れできない状況がみてとれる。特に、不在村は所有森林から離れたところに住んでおり不利な条件にあり、余計手がかけられない状況にある。

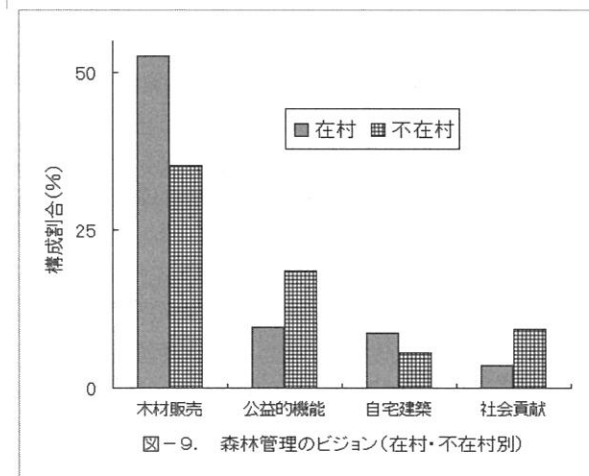
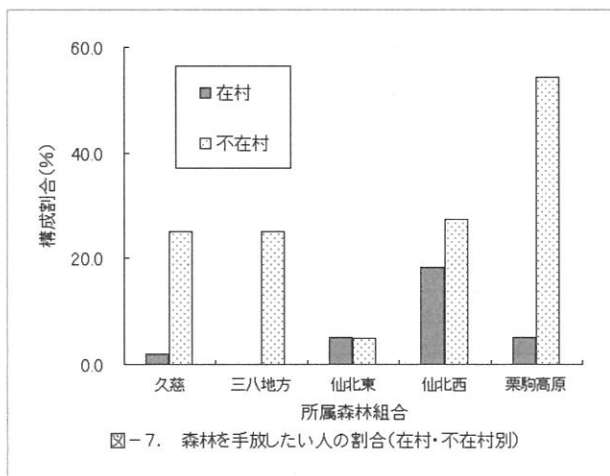
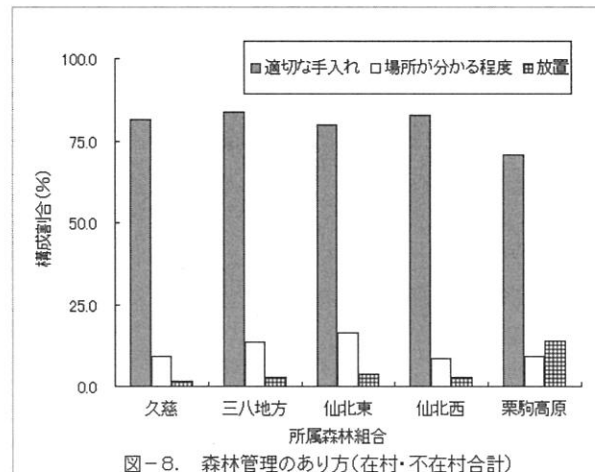
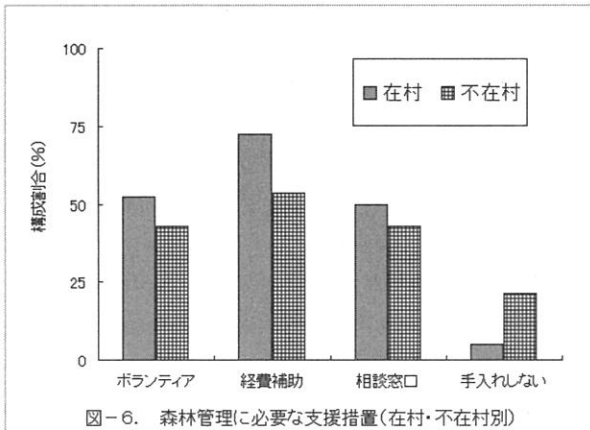
そして、必要とする支援措置については、5森林組合の在村・不在村とも「費用を軽減する措置」を求める組合員が最も多く、それぞれ72.5%、53.6%、「ボランティア団体等による支援」を期待する組合員はそれぞれ52.5%、42.9%、「手入れの相談窓口」を求める組合員が、それぞれ50.0%、42.9%となっており、在村の方が要望は強い。しかし、「どのような支援措置があっても手入れしない」という回答については、在村5.0%、不在村21.4%と不在村の方が多かった(図-6)。

今後の森林所有の意志については、在村5.6%、不在村

28.6%の組合員が「森林を手放したい」と答えている。このように、5森林組合全体の86.2%の組合員が所有を続ける意志を示しているが、仙北西では在村の18.2%、不在村の27.3%、栗駒高原では不在村の54.4%、三八地方、久慈では不在村の25.0%の組合員が「森林を手放したい」としている(図-7)。そして、「森林を手放したい」とする組合員の71.4%が「最も高く買ってくれる人に売りたい」という意向をもっている。

森林を所有し続ける意志のある組合員の今後の森林管理のあり方については、「できるだけ適切な管理をしたい」と考えている組合員が在村82.1%、不在村68.5%とその殆どを占めている。しかし、仙北東16.4%、三八地方13.5%の組合員が「所有森林の場所が分かる程度の管理を行えば良い」と考え、栗駒高原では13.8%の組合員が「放置」と回答している(図-8)。

そして、森林を所有し続ける意志のある組合員の今後の森林管理のビジョンとしては、在村の52.6%が「木材販売を目指した林業経営をしたい」と答えたのに対し、不在村は35.2%であり、在村の9.7%、不在村の18.5%



が公益的機能重視を目標にし、在村の 8.7%が自分の家を建てるときに使う、不在村の 9.3%が社会貢献を目標にしている。林業の不振が続けば、このような木材販売を目指している所有者の林業経営への意欲を削ぎ、森林管理の放棄が進んでいくことが懸念される(図-9)。特に特徴的だったのが、地球温暖化防止といった公益的機能発揮を森林管理の目的にしている組合員が 20.0%いた栗駒高原である。

また、森林を所有し続け、適切に管理したいという組合員で、今後、森林の手入れを、お金を払って森林組合に依頼したいとする組合員は不在村の方が多く 48.7%、在村は 44.7%、自力で手入れを行うは在村の方が多く 34.8%で、不在村は 21.6%となっている。そして、在村について森林組合別にみると、森林の手入れをお金を払って森林組合に依頼したいとする組合員は三八地方で最も多く、50.0%であったのに対し、栗駒高原が最も少ない 38.5%であり、自力で管理を行う組合員が最も多かったのが仙北東の 44.8%であったのに対し、最も少なかったのが三八地方の 23.1%であった(図-10)。

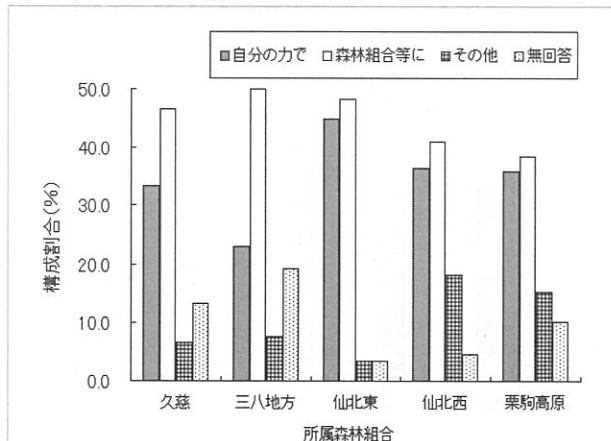


図-10. 森林の手入れの手段(在村のみ)

III まとめ

以上のアンケート結果をもとに、東北地方 5 森林組合の組合員の森林管理に対する考え方を取りまとめてみる。組合員の多くは、将来とも森林を所有し続け、木材の販売を目指した林業経営を行いたいと考えている。そして、多くの組合員が森林管理にかかる費用を負担に感

じ、その軽減措置を求める一方、「手入れの相談窓口の充実」や「ボランティア団体等による支援」を求める声も多い。

また、自力の森林管理が可能な在村組合員について、「森林管理が良好」と答える組合員が約 70%を占める三八地方や仙北東で、森林管理を森林組合に委託する組合員も多いが、自力で森林管理を行う組合員も多い。しかし、三八地方では、「これからも自力」でと答える組合員の割合は 5 森林組合中最も小さい。久慈、仙北西、栗駒高原の 3 森林組合の「森林管理が良好」と考える在村組合員は 55%程度であるが、基本は森林組合主体、自力が補完する形であり、「これからも自力で」という組合員の割合は縮小傾向にある。特に、栗駒高原については「森林組合に委託」のウェイトが最も小さく 38.5%であるし、仙北東については「自力」のウェイトが最も高く 44.8%である。このような地域的な特徴等詳細については今後の検討課題である(表-2)。

このように、これまで森林管理を自力で行ってきた組合員も、「時間的余裕がないこと」や「高齢で手入れができないこと」などから、森林組合に森林管理を委託せざるを得なくなっている。東北地方森林組合員の森林管理の状況は様々であるが、森林管理を作業・技術面で支援する、森林組合への期待は大きい。そして、委託したくても資金事情から委託できない状況が、普通にみられるようになってきている。適正な森林管理を行うための資金面の支援(デカップリング)が、健全な山村社会を守る面からも求められている。

本調査の実施にあたり、久慈、三八地方、仙北東、仙北西、栗駒高原の各森林組合に大変お世話になった。この場を借りて、お礼を申し上げる。

参考文献

林野庁森林整備部(2001)地球温暖化防止のための多様な森林整備に関する調査報告書. 99pp, 東京

区分	森林管理が良好	これまでの森林整備の主体		これからの森林整備の主体	
		森林組合	自力	森林組合	自力
久慈森林組合	54.7	63.6	54.5	46.7	33.3
三八地方森林組合	70.0	74.1	55.6	50.0	23.1
仙北東森林組合	69.2	75.7	64.9	48.3	44.8
仙北西森林組合	57.6	61.5	46.2	40.9	36.4
栗駒高原森林組合	53.4	70.6	55.9	38.5	35.9